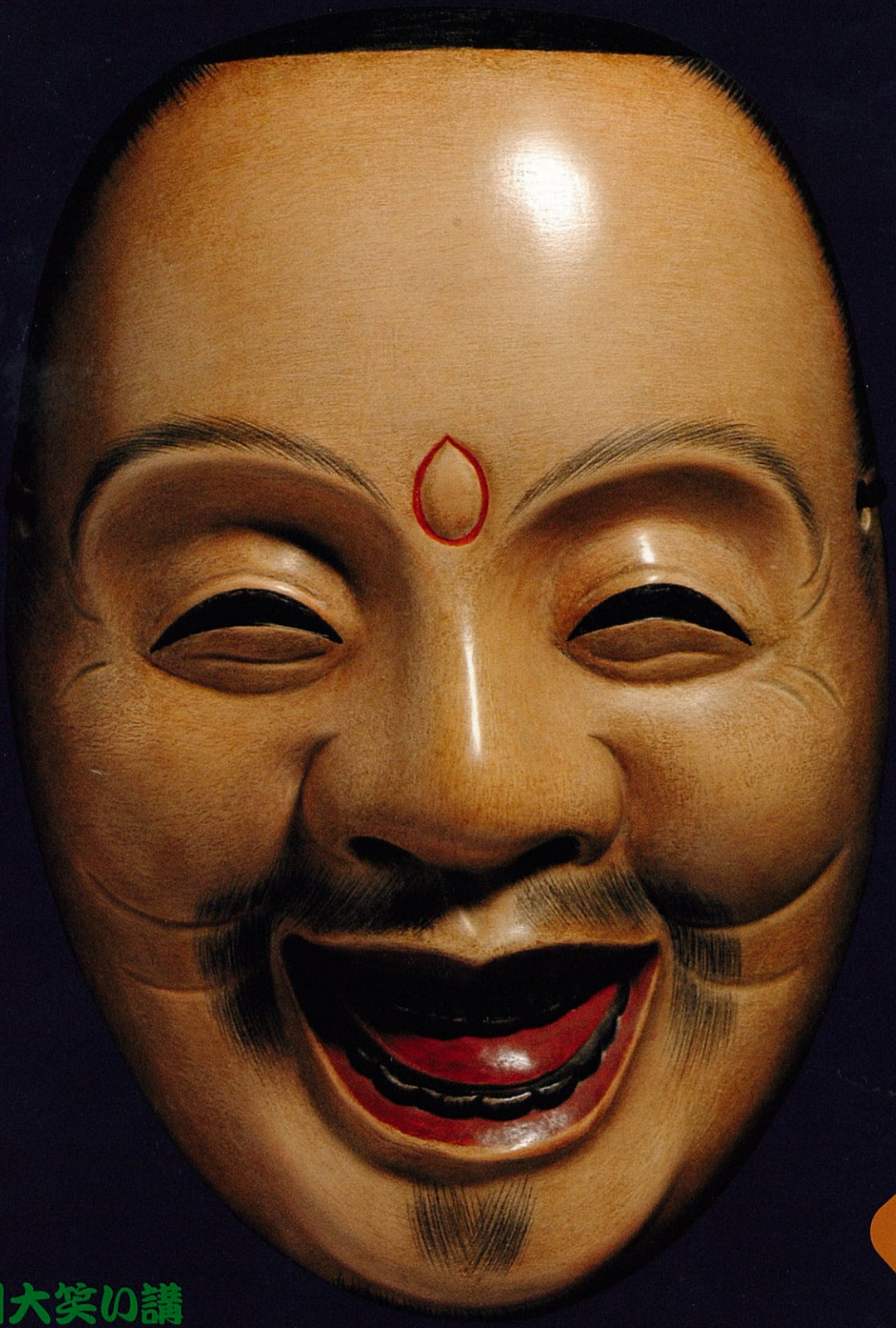
笑う門には福来たる



参加無料

新春 関大笑い講

一の福

吉本興業寄附講座＊笑いの総合科学をめざして

2008年1月11日（金） 14:40-17:50 関西大学BIGHALL100

第1部　大阪発・笑いの力と生きる力　喜味こいし(交渉中)×吉本興業社長・吉野伊佐男×笑い学会会長・関西大学名誉教授・井上 宏
第2部　ぼくらはなぜ笑いを選んだか　関大落研OB　桂枝三郎 桂三象 桂三金ほか
第3部　第２回関大笑い講の儀　狂言「福の神」関西大学教授・関屋俊彦×大和座（安東伸元門下生）

二の福

シンポジウム＊笑いを科学する―「DLM笑い測定機」の可能性―

2008年2月23日（土） 13:00-17:00 関西大学社会学部4302（予定）

基調講演　京都大学教授・苧阪直行　　報告　関西大学教授・木村洋二

連絡先
主催：関西大学ソシオン研究プロジェクト・ユニット　後援：吉本興業(株) 吹田市 日本笑い学会
E-mail: socion@ipcku.kansai-u.ac.jp　http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~socion/

面製作・見市泰男

笑いは神のもうひとつの姿である

日本の古い神話を伝える『古事記』によれば、弟スサノオの狼藉に怒った姉の太陽神アマテラスは、世界を見限って岩穴にこもってしまった。太陽が隠れたのだから、世界にもはや日は射さず、高天原は闇に覆われる。暗い日々がつづくのを案じた神々が高天原に集まって衆議を重ねるが、絶望は深まるばかりである。このとき、ひとりの勇敢な女神、アメノウズメが立ち上がりとつぜん踊り始める。ノッテきた女神は（たぶんオモシロオカシク）腰をふりながら、ついに「裳紐をホトまで押し下げる」のである。この完全ストリップに驚いた神々の出力系は、激しいズレ上がり（ascending incongruity）を経験したあと、大きなズレ下がり（descending incongruity）の余剰のなかで、しっかりハズレてしまう。つまり、神々は「大笑い」をはじめ、どうにも止まらなくなるのである。この「大笑い」が、岩屋戸に隠れた太陽神、つまり光りと希望をふたたびこの世に引き戻した、というすばらしい神話である。女神の突然の「ストリップ」（図式のズレ incongruity）による「大笑い」（負荷脱離 unloading）がこの世に太陽の「光り」（余剰出力 affluent nothingness）をとりもどした（ズレて、ハズレて、アフレた）。この神話の、なんとおおらかで論理的なことだろうか！

日本でもっとも古い神社のひとつとされる熱田神宮（上記スサノオが倒したヤマタノオロチのしっぽから出て来た草薙の剣が祀られている）にはじつに興味深い神事が伝わっている。5月4日の日没時、正装した神官たちが一列になって摂社に向かう。暗闇で円陣を組み、厳かにある木箱の蓋を開けたあと、暗がりで「古来より見てはならないと語り伝える神面」を叩いて「オホッ」という奇声を発する。これを数回繰り返した後、ひとりの神官が笛を吹く。しかしピッピョーと変な音しかしない。それを聞いたその他大勢の神官は口々に「ワーハッハー」と高笑いをする。下手くそな笛に神官たちはズッコケてしまったのだ。この妙竹林な儀式を何度か厳粛に繰り返したあと、蓋が閉められる。このようにして「笑い」を封入した神聖な木箱を恭しく担ぎ上げた神官たちは、境内を厳かに巡行して4つの社でこの秘儀を反復するのである。森下伸也氏からこの「笑酔人（えようど）神事」の祭りのビデオを見せてもらったとき、筆者の背筋には戦慄が走った。まさに、古代の日本人は、笑いが神の化身であること、神がそれであったところのエネルギーが溢れ出したものであることを熟知していたのである。熱田神宮の笑いの神事は、このエネルギー、神聖な無、愉快な空無を、神がそれであるだろうところの力として、未来にむけて送りだす神聖な奉納儀礼なのだ。しかし、それは秘儀として秘匿されなければならない。なぜなら、笑いは0の演算子であり、すべてを無に帰す破壊者でもあるからだ。笑いを神に（いや、おそらく神として）奉納するこの神聖な儀式が、まさに夜、暗闇のなかで秘儀として執り行われなければならない理由がここにある。わが国で最も古い歴史をもつ神社のひとつで、千数百年の間絶えることなく続いてきたこの神聖な儀式は、「天の岩戸開きの神話」とともに、日本人の存在論的洞察力と日本文化の源泉を端的にさし示す、世界に誇るべき第一級の文化的遺産である。

20世紀は充ちた意味を目指して流血を引き起こしたイデオロギーの世紀であった。意味がナイことを豊かに享受する笑いとユーモアは、すべてのヒトに恵まれたゼロの演算子である。笑いは、「意味」の呪縛から精神を解放する。地上の楽園は、山のあなた、海のかなた、遠いみちた場所にあるのではない。笑いのメカニズムと機能が科学的に解明されたとき、人類はその偉大な無＝ゼロの力によって、欲望と意味の呪縛を解かれてあたらしい進化の道を歩みはじめるだろう。

「天の岩戸開き」の神話をもつ日本民族こそ、この笑いの秘密を現代科学の総力をあげて、全世界に先駆けて解明すべきである。21世紀が、豊かな無の躍動する笑いとユーモアの世紀となるよう、関西大学ソシオン・プロジェクト・ユニットでは2007年「笑いの科学プロジェクト」をスタートさせた。2008年1月11日「新春笑い講」と2月23日シンポジウム「笑いを科学する」は、「神のもうひとつの姿」を千里山に迎えて若者の未来を寿ぐささやかな岩戸開きの試みである。

コーディネーター　関西大学教授　木村洋二